

# 越境の都市的世界と場所への繋がり、場所の獲得 —沖家室とホノルル・アアラ及びカカアコの越境者たち—

広田 康生

本稿は、日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムの「記憶」として、特に明治後期から昭和初期の「越境の時代」における日本人越境者のトランスナショナリズムの位相と「都市的世界」の意味を、場所の獲得という観点から、事例をもとに考察する。

本稿で取り挙げる事例は、山口県周防大島の属島沖家室（おきかむろ）から布哇に移民し、特にホノルル・ダウンタウン（アアラ街とカカアコ地区）を中心的な生活の「場所」とした越境者である。この事例をグラスルーツ・トランスナショナリズムの一つの「記憶」として取り上げる理由は、まさに彼らの越境実践が当時のナショナリズムの落とし子であると同時に、国家に回収され尽くさない「都市的世界」の役割と、国家への帰属意識に回収されない「場所」への繋がり、「場所」の獲得を展開し、グローバリズムともナショナリズムとも距離を置いた日常生活からのトランスナショナリズムの展開を考える示唆が得られると思うからである。移動をする人/せざるを得ない人々を繋ぎとめる象徴的な場所へのアイデンティティと「都市的世界」の意味を、日本人のトランスナショナリズムの具体的な「記憶」の中に探してみたい。

## 1. はじめに—本稿の意図

今、移民研究、越境移動者の研究の持つ多様な含意に注目が集まっていることについては別稿において示した（広田 2006 ; 2011）。そしてグラスルーツ・トランスナショナリズム論の意義が、グローバリゼーション論と一定の距離をおきながら、しかし閉塞的なナショナリズムに陥ることなく、「都市的世界」を具体的、現実的な舞台にして、場所と人との関係に関する新たな問題提起を行っていることについてもすでに指摘した（広田 2011）。

ここで筆者は、改めて、磁場としての「都市的世界」の具体的な姿、越境移動者の「場所とアイデンティティ」の具体的な位相を、日本の戦前の移民に焦点を合わせて考察してみたい。そうすることで筆者は、日常生活の重みに根ざしつつ、「越境の時代」の場所と人との繋がり位相の原点に関する手掛かりを得られると考える。

本稿ではそのための事例として山口県周防大島の属島である沖家室からの布哇への移民の越

境実践を取り上げる。2.1 で述べるように明治後期から第二次大戦まで、沖家室からは、台湾、朝鮮、満州、布哇、米国本土、南米への多くの移住者が出ている。無論この時期に台湾（1895年併合）や中国本土そして朝鮮半島（1910年併合）に移住者が行くのは珍しいことではない。だがこのような小さな島の壮年男子の多くが海外移住し、その移住者たちが本島の住民と濃密な繋がりを絶やさず、さらに現在まで国内外の各地で沖家室を「象徴的な場所」もしくは「記憶の中の場所」として、郷友会組織としての「かむろ会」を作り結びついている、という例は珍しい。こうした「ディアスポラ」的な越境者としての位相と場所との繋がり、場所の獲得の具体的位相を知るとは、現在のような越境移動の時代の「場所」とは何か、「ディアスポラ性」とは何か、「都市的世界」とは何か、その意味を考える上で示唆的である。

本稿で筆者は、越境移動者と本島在住者とを繋ぎとめる媒体としての雑誌『かむろ』から見えてくる現実と、ある人物の『自伝』、そして移動先の布哇ホノルルの「都市的世界」に関する現地での若干の資料収集と聞き取りを頼りにしながら、沖家室から越境した人々がどのように出身地と繋がり、出身者と繋がり、どのように「都市的世界」を経験し利用したのか、移動の「磁場」としての沖家室の様相や、現在に繋がる越境移動者と本島在住者たちのかかわりについて描いてみることにする。

## 2. 移動の「磁場」沖家室と雑誌『かむろ』の世界

### 2.1 移動の「磁場」としての沖家室

沖家室島は、山口県周防大島（屋代島）の南東に位置する属島で、面積 0.95 平方キロメートル、平成 22 年度の世帯数約 115 世帯、住民 200 名弱で、現在は本島の周防大島と橋で繋がっている。周防大島自体は、明治 18 年の第 1 回官約移民以来多くの布哇移住者を排出した（周防大島町編 1959；宮本・岡本 1982）。それに従って沖家室からも、明治後期以降、多くの移民を輩出することになる。

ただ、沖家室はもともと移動者、越境者の「磁場」であった。その理由の一つは土地の狭隘さという物理的条件以外に、もともとこの島が「釣り漁の島」、漁業の起点であったことと関係している。たとえば、『沖家室 瀬戸内海の釣り漁の島』を執

図 1. 沖家室



(筆者作成)

筆した森本孝・須藤護・新山玄雄は、沖家室住民への丹念な聞き取り調査も交え、漁民社会としての「沖家室島」の側面について、「漁民同士の中では大船頭、船頭、船方というタテの構造」が、特に「馬関組や伊万里組のような出稼ぎ漁組」に発達し、大正期から昭和にかけて、対馬浅藻、朝鮮、濟州島、台湾、布哇ホノルル、ヒロ等に「移住漁業者と思える人々」が国境を越えて移動、定住していた、と指摘している（森本・須藤・新山 2006：15 - 33）<sup>1)</sup>。

同じく「沖家室島」の民俗を研究している天理大学の安井真奈美は、『東和町誌』や『山口県政史』そして沖家室惺々会編雑誌『かむろ』等の資料と自らの聞き取り調査を交え、明治後期、大正末から昭和にかけての沖家室の生業について調査し<sup>2)</sup>、特に日露戦争を契機にした日本の漁場の拡大とともに、九州や対馬への遠洋漁業の基地としての役割を果たし始めたこと、さらに大正期に入ると朝鮮方面への船団を組んだ出漁の基地になったことを指摘している（安井 2010：813）。

さらに筆者が注目したいのは、この島が漁業の中心地と同時に商業の中心地でもあり、物資の移動、情報の結節点、媒介点という意味での「都市」の側面も持っていたこと<sup>3)</sup>、そしてそれは、東京の「都市的世界」にも繋がっていたことである。ちなみに、本稿で取り上げる、当時16歳のM.O氏は、雑誌『少年世界』を読んで、瞬時に移民の情報について、苦学生の支援や移民支援をしていた東京の「力行会」の島貫兵太夫に問い合わせている。ちなみに、雑誌『少年世界』はまさに「都市的世界の象徴」であり、その読書空間を通じて当時の国民国家の思想を植え込む媒体であったという指摘もある（成田 1994）。ただ、そうした情報が沖家室には瞬時に入っていたこと自体、この島が情報の結節点だったことをうかがわせる。

ところで、こうした情報の結節点としての沖家室の社会は、商家と漁家との独特の関係性によって維持されていたといわれている。例えば、前出の安井は、沖家室島在住の人々や出身者への丹念な聞き取り調査をもとに大正から昭和初期の「沖家室島」を構成する二つの集落である「本浦」と「洲崎」それぞれに、人口に見合わないほどの商業施設が出来ていたことを指摘している（安井 2010：845 - 849）。それらの商業施設は、洲崎においては、「造船所」「旅館」「歯科」「釣具店」「米穀店」「ひょうたん屋」「散髪屋」「鉄工所」「酒店」「電気店」「古物商」「金物屋」「ブリキ店」「たばこ店」「診療所」「仕立て店」「パン屋」「うどん屋」「呉服屋」などが47店、本浦においては、「文具店」「下駄屋」「代書屋」「髪結い店」「風呂屋」「菓子店」「銀行」「造船所」「写真屋」等々44店が並んでいた（安井 2010：849 - 849）。この時期の沖家室の人口、世帯については、ほぼ上記の時期と同じ大正15年に発行された沖家室惺々会編『かむろ』（第68号）に大正14年実施の国勢調査結果が掲載されているが、それを見ると「沖家室島」の人口は男が963人、女が926人の計1,888人で（戸数は掲載されていないが、大正9年の国税調査では558戸となっているのでその前後であると推測する）、この数字からしてもいかに多

くの商家と漁家が密集していたかがわかる（沖家室惺々会編 1925：35）。

漁民社会と商業社会との連携の仕組みについて森本・須藤・新山の前出書は、「ショウヌシ（商主）」と呼ばれる仲買人——多くは島の旧家である商家——に注目し、「ショウヌシ（商主）」と漁家が「一種の親方、子方関係で結ばれていた」ことを指摘している（森本・須藤・新山 2006：35）。森本らの聞き取り調査によると、旧家である「ショウヌシ（商主）」は、「魚を入れてくれる子方を一軒でも多く持つことが利益につながった」ため、「新たな船を造る漁師にはその資金を無利子で貸した」とし（森本・須藤・新山 2006：37）、さらに島の「ショウヌシ（商主）」のなかには「旦那様と呼ばれる分限者」が何軒かあり、「松山や朝鮮の釜山におびただしい家作をもって」おり、しかしこの「ショウヌシ（商主）」と漁家との関係は固定したものではなく、「借金さえ返済すれば（漁民は）別のショウヌシと契約し魚を入れることも可能」で、「この意味では親方、子方といっても従属的なものではなく、柔軟な関係が保たれていた」と指摘している（森本・須藤・新山 2006：37）。

筆者は2010年の8月、2011年の7月、8月に「沖家室島」在住のある旧家の住民や町内会長そしてこの島の精神的かつ実質的な支柱でもある泊清寺に、沖家室社会の「柔軟性と繋がり」の強さ（拘束性）について僅かながら聞き取りをする機会があったが、例えば現在でもこうした開放的で柔軟性に富みつつ拘束的でもある関係性は、家を残し出島した人々と残した家の管理をめぐる関係のなかに、あるいは島外居住者の町内会費納入や、狭い土地にあって各戸の助け合いと自己管理への要求の強さという社会的な慣行の側面にも維持されていることが感じられた<sup>4)</sup>。後述するがそれは、国内外の沖家室出身者が現在でも結成している“郷友会”組織とも言うべき「かむろ会」——「東京かむろ会」「関西かむろ会」「宇部かむろ会」「広島かむろ会」そして2年前にその役割を閉じたが「布哇沖家室人会」等々——の繋がりにも反映されていると筆者は考える。

この島が持つ、人の移動と情報の結節点、媒介点と言う意味での「都市」性は、泊清寺が江戸時代以来の参勤交代の本陣であったという歴史も影響しているが、やはり商家と漁家が密集し、沖家室自体が、出島した島民の住む幾つもの「場所」との関係性のなかでしか成り立ち得ないという条件とも関係している。そして沖家室という場所の移動の磁場性と出郷せざるを得ない特殊な状況が、独特の「場所へのアイデンティティ」を創り出してきたことに繋がっていると筆者は考える。

3.2そして4で詳述するがこうした「場所へのアイデンティティ」は、一種の「象徴的コミュニティ」「記憶としてのコミュニティ」としての位置を沖家室に与えたと筆者は考えるが、次にこの移動の「磁場」としての沖家室島が、いかに国境を越える越境実践を生み出し、越境者を繋ぐ特殊な装置を創り出したかを、当時としての「越境の時代」を背景に見て行きたい。

## 2.2 初期トランスナショナリズムの時代背景と雑誌『かむろ』

——明治後期から昭和初期のナショナリズムと米国・伯国への「海外熱」の中で——

ハルミ・ベフは、日本人の「グローバル化」が、3期に分けられると述べている。ベフによると第1期は、16世紀の博多や堺の商人の資本蓄積の時期であり、「日本のグローバル化が商人の自主的な行為だった」時期であり、第2期は、明治初期から昭和45年までの時期である（ベフ 2006:29）。日本人のグローバル化は「元年者」と呼ばれる移民が布哇王国に渡って以来、官約移民、私約移民、家族呼び寄せ時代へと続いた。ベフによれば、日清戦争（1894年～1895年）で樺太、台湾を、そして日露戦争（1904年～1905年）で朝鮮を「併合」したことが、そのグローバルな移動に拍車をかけ（ベフ 2006:31）、「この人的拡散には、個人の意思に加えて、当然、国家政策が大きくかかわっていた」（ベフ 2006:31）。ベフによれば「アメリカへの移民は、政府が関わり、移民会社が介入したが、日本の人口問題解決に利用され」、同時に「植民地・占領地に日本人を定住・駐在させて日本国家の恒久的占領の基盤を作」った（ベフ 2006:31）。「人的拡散は、ハワイを嚆矢にし、北アメリカに向かい、少し遅れて、南アメリカ、そして東南アジア、アジア大陸、台湾、樺太、大洋州へと広がっていった」（ベフ 2006:31）。そして第3期としてベフは、敗戦後の日本人日系企業の展開の時期を挙げている。ベフは「1994年には、日本国籍所有者69万9895人が海外に長期滞在者あるいは永住として住んだ」と指摘している（ベフ 2006:36）。

本論で焦点を当てている沖家室島からの越境者は、ベフの時期区分で言えば第2期（特に明治後期から昭和初期まで）に当たるが、筆者は、移民に対するこの国家的政策が、特に青年、青少年に対しては「渡米熱」として越境移動を煽っていたことについても触れなければならない。成田龍一は、1900年前後における「国民国家形成の原理としての『われわれ』/『かれら』の区分と、国民国家の転態の原理である『われわれ』内部の差異の呈示の双方がたちあられる」のがこの時期であり、それが都市空間のなかで顕在化すると述べている（成田 1994:220）。現実社会のなかでの「苦学」の行く先として移民が想定されていたという図式もこうした認識を背景にしている。

無論、この時期の「移民熱」あるいは「渡米熱」は現実社会の「高等遊民問題」とも関わっている。町田祐一によれば「国家の上流から中流を支配する社会層として期待され（ながら）…学歴に応じた立身出世」に必ずしも順調に乗れなかった「高等遊民」（町田 2010:6）は、「高等教育機関在学者の割合の五分の一から一割強を占める毎年二万人単位」で発生し（町田 2010:9）、それは到底無視できる規模ではなく「学校や官公庁など、日本の中枢機構が集中する東京に顕著に確認されていた」（町田 2010:9）。町田は、こうした問題の国家的な解決策として「地方回帰」と「海外進出」があったと指摘している。

ちなみに町田は、問題とされた「高等遊民」を、「高等遊民問題への抜本的な対策を企図した」第二次桂太郎内閣の文相小松原英太郎の分類に依拠しつつ、①資力のある国家志向型、②資力のある非国家・反国家志向型、③資力のない、国家志向型、④資力のない非国家・反国家志向型に分類し、①は相当の資産を有する上流社会の子弟であり生活に窮せざる者、②は相当の資産がある上流社会の子弟だが、非国家・反国家志向でありながら「其の資産名望を以て一致人民を指導し地方の改良に貢献」も期待できるもの、③と④は、問題の中心で「最高の教育ある者にして一朝不平を抱き遂に社会を呪わんとする懸念のあるものとされ、これら特に③と④が特に危惧されていた、と指摘している（町田 2010：9-11）。

無論、北米への日本人移民に対する国家の政策は、その後カリフォルニアを中心にした排日事件を背景に1900年には労働移民の北米・カナダへの渡航一時禁止となり、「1907年には日米紳士協定を締結し、移民を制限する方針へと展開した」が（町田 2010：85）、海外移住熱自体は止むことなく、1908年以降はブラジルやペルーなどの南米移民へと引き継がれていく。

アメリカやブラジル移民（1907年以降）等の海外への移住は、日露戦争以後のナショナリズムの高揚と相まって、民間においても盛んに煽られたことは事実である。

その推奨母体の一つに「力行会」があった。設立者は島貫兵太夫である。島貫は東北学院大学神学部を卒業後、紆余曲折を経て1894年（明治27年）に上京し、牧師をしながら「海外教育会」——朝鮮併合の前後に、朝鮮の青年層の”教育”のために組織された団体で、大隈重信らも関わっている——などに参加し、その後「神田教会」を作り、救貧事業に参加する一方、1897年（明治30年）に「力行会」を設立した。嶋貫はその「力行会」の中に「渡米部」をつくり、青年層の海外移住活動を開始した（島貫・相沢 1980）。この「渡米部」は、当時、水野龍が経営していた「皇国植民社」と並んで東京においては青年層を海外に送り込む「移民会社」「移民促進機関」として代表的な存在であった（香山 1976：114-115）。

島貫兵太夫の自伝（相沢源七改稿出版）には、「西欧の文明、思潮が日夜侵入しつつある今日、思想界に革命の曙光のほの見ゆる時に当たっては、青年の逆境者ほど危険なものはないということとその時以来考えていた」（相沢・島貫 1980：55）とあるが、その対象は前出の町田の分類の③と④の層にむけられており、島貫の活動は当時の日本社会のナショナリズムとともに実践されたものであったと解釈される<sup>5)</sup>。

3.2でその『自伝』を取り上げる沖家室島出身者で1908年に布哇に渡り、ホノルル・カカアコに住みアラ街で漁業会社を設立し、その二世代目及び三世代目が現在もホノルルのフィッシング・ビレッジで、United Fishing Agency(全米唯一の「魚のオークション」を行っている漁業会社)を創設した前出のM.O氏も、既に述べたように、17歳で渡布する前に嶋貫兵太夫と手紙のやり取りをしている。ちなみに「力行会」は1914年（大正3年）に永田稔が二世代目の会

長になるが、そのころになると救貧事業よりはむしろ移民事業が主体となり、永田は移民会社をつくり、村井保固の援助や、新渡戸稲造らとの繋がりの中で、ブラジル・サンパウロ州のアリアンサ農場に「力行会農園」を開き青年層を送りだす（永田 1942：71-80）。この当時ブラジル移民を推奨した村井保固は、1876年（明治9年）に森村豊が中心になってニューヨークに店を開いた「森村ブラザーズ」に入社し、陶器や日本雑貨販売ビジネスに取り組み、アメリカ東海岸における日本人コミュニティを切り開いたひとりであるが<sup>6)</sup>、1907年以降は、新たな海外事業の開発の新天地をブラジルに求めている（大西 1933）。さらにブラジル移民に関しては、仙台でデパートを開業していた藤崎三郎助は、まだ領事館さえ出来ていない1906年に、ブラジル・サンパウロ市に「藤崎商会」を置き、移民の受け入れ準備を整えていた（長沢編 1932：120-130）<sup>7)</sup>。それは、サンパウロの施設領事館という体裁をなしていたといわれている（長沢編 1932：131-132）。このような社会的背景のなかで「力行会」は、「大阪商船会社」「三菱合名会社」「三井合名会社」「日本優先会社」「東洋製糖会社」「鐘ヶ淵紡績会社」「住友合名会社」等々の企業からの寄付金を集め、海外事業に乗り出すのである。

こうした時代背景のなかで、沖家室からの越境実践がどのように展開したのか。本稿ではまず基本的な事実として、沖家室惺々会編の雑誌『かむろ』を手掛かりに、まず沖家室島からの国内外を含む越境の場所と職業を見ておきたい。

「沖家室惺々会（せいせいかい）」とは、沖家室在住及び出身者によって構成され、雑誌『かむろ』の編集主体である。「沖家室惺々会」は、大正3年（1914年）に沖家室在住者と国内外に出郷した沖家室出身者の消息や親睦を図り、併せて沖家室島の風俗の改良、沖家室人の養成を目指して結成された（それは戦争終結の1944年まで続いた）。「沖家室惺々会細則」の第四条には、「本繪員は男子ニシテ年齢三十五才マデヲ正繪員トシ、十一歳以下及び六歳以上を賛助会員トシ、名誉会員ハ年齢をトワズ」とある（泊清寺編 2001：18）。会費は一人40銭である。会員はこの他に、「沖家室惺々會會則」第9条によると賛助会員——本会の趣旨に賛同するもの——のうちで役員会に認められたもの——や名誉会員——費用1円を納入するもの——もあった（泊清寺編 2001：77）。

雑誌『かむろ』自体は、沖家室島からの国内外への移住者の住所や近況、そして繋がりを絶やさないうちに大正3年から昭和19年まで刊行され、現在、大正3年から大正9年までの刊が復刻されている。この雑誌は、設立当時、当分のあいだは年間4回の発行を目指していることが明記されている（沖家室惺々會會則 第三條）。前述のようにこの雑誌には、消息だけではなく、沖家室惺々會會則の第二条にあるように、「本島ノ風俗の改良及ビ村是ヲハカル」「本島物人ノ養成ニツトム」とあるように（泊清寺編 2001：76）、「共同体的規制」を意識しつつ越境労働を推奨した様子が窺い知れる。さらにこの雑誌には、一行程度で多くの会員が消息を訊ね

合う、さしづめ現在の掲示板のような頁があり、越境労働を推奨しつつも国境を越えて移動する人々をいかに沖家室という場所に引きつけ、地域社会の結束を固めつつ、そのつながりを維持するかという仕組みがみられる（泊清寺編 2001；2002；2004）。

実際の越境移動の場所と人に関する記録はどうか。『かむろ』には、定期的に国内外の会員の所在地と職業の記録が掲載されている。無論住所の正確な記述というよりは居住している街区が掲載されている。前述のように雑誌それ自体も、大正3年から大正9年（1920年）までが復刻されているが（泊清寺編 2001：16-21）、その他の号は残念ながら復刻されていない。ただ、たまたま筆者は「東京かむろ会」の会長を長い間勤めた S.Y 氏（2011年12月逝去）のご家族のご好意で、大正10年以降に発行され、まだ復刻されていない雑誌のとぎれとぎれの号をお借りすることができた。その中で、『かむろ 第34号』（大正10年1月号）（沖家室惺々会編 1921年）には、本稿で取り上げるホノルル・カカアコ地区居住者の記録も含め沖家室から国内外に越境移動をした人々の住所と職業が出ている。後述するように1921年は「布哇沖家室人会」が結成された年でもあるので、それをもとに、移動状況をまとめたのが、表1、表2、表3である。なお前出の安井論文には、昭和5年の『かむろ』を資料とした数字が掲載されているのでこちらも参照していただきたい。

表1 沖家室出身者の移動先と職業（大正10年）

職業	本島在住	本島以外の日本										
		大島郡	山口県	愛媛県	兵庫県	鹿児島県	福岡県	佐賀県	長崎県	大阪	東京	その他
漁業	9							6				
造船業・船大工	2											
手ぐす製造	1											
生漁業	3											
建築・大工	2	1										
建築技師											1	
商業・店員	11	1	1			2	6		2	1	2	
菓子製造業	2											
履物製造	1											
瓦職人							5					
住職・僧侶・神官	1	1		1								
会社員・官吏							1			1	2	
貿易商											1	
教員	3	2										
養産業	5											
農業	3	1										
薬業・薬剤師	1									1		
写真師						1						
仕立て業	1											
医者	1											
ゆうびん局勤務	1											
金貸し業	1											
醤油製造	1											
銀行・信用組合	1				1							
学生	0	1	3		1	1						
入営				1		16						
不明						3		1				
その他	1		2									
計	50	7	6	2	2	23	12	7	2	3	6	

（沖家室惺々会編『かむろ』第34号（大正10年=1921年1月号）より筆者作成）



表 2 沖家室出身者の移動先と職業（大正 10 年）アジア編

職業	朝鮮										滿州					台湾			
	京城	仁川	開城	平壤	群山	鎮南浦	全羅南道・北同	信義州	その他	安東	鞍山	奉天	旅順	青島	基隆	台北	高雄	その他	
漁業																			
造船業・船大工		3													3		9		
手ぐす製造															1				
生漁業																			
建築・大工	1	1				1													
建築技師																			
商業・店員	6	3	8	4	2	4		1	2	4	1	4		2	1	1	1		
菓子製造業						1			1										
履物製造																			
瓦職人			1																
運送業	3							1											
住職・僧侶・神官																			
会社員・官吏	1			2						1									
貿易商								3		2									
教員																			
養産業																			
農業																			
薬業・薬剤師																			
写真師																			
仕立て業・染物						1													
印刷				1															
医者												1							
郵便局勤務							1												
金貸し業																			
醤油製造			1	3		3													
米穀商		1						1											
銀行・信用組合																			
学生	1																		
入営						1							1						
不明																			
その他							1(牧畜)		1					1	1		3		
計	13	8	10	11	2	11	2	6	4	7	1	4	1	2	9	1	13	1	

(沖家室僅々会編「かむろ」第34号(大正10年=1921年1月号)より筆者作成)

表 3 沖家室出身者の移動先と職業（大正 10 年）布哇・北米その他

職業	布哇		ヒロ	北米大陸		南米大陸
	ホノルル	(内カカアコ)		カリフォルニア	バンクーバー	
漁業						
造船業・船大工	29	13	6		3	
手ぐす製造						
生漁業・魚仲買	3	2	2			
建築・大工	3	2				
建築技師						
商業・店員	5	2	8	1		
菓子製造業	1					
履物製造						
瓦職人						
運送業	1					
住職・僧侶・神官			2			
会社員・官吏	3(漁業関係)		1(会社経営)			
貿易商						
教員						
養産業						
農業						1
薬業・薬剤師						
写真師						
仕立て業・染物	1		1			
印刷						
医者	1					
ゆうびん局勤務						
金貸し業						
醤油製造						
米穀商						
銀行・信用組合						
学生				1		
入営			1(米国軍人)			
不明			1			
その他	1(鍛冶)		3(散髪、風呂屋、氷業)			
計	50	(内19)	25	2	3	1

(沖家室僅々会編「かむろ」第34号(大正10年=1921年1月号)より筆者作成)

表1、2、3を通じて言えることは、第1に、越境者の割合がやはり人口に比べ異常に多いことが追認できる点である。ちなみに、大正9年に初めて実施された国勢調査の結果が、『かむろ』（大正10年7月号）に掲載されているが、それによると、「沖家室島」の戸数は、558戸、男843人、女969人の計1812人と記されている（沖家室惺々会編 1921：19）。

表1は、本島に在住している人と本島以外に出ている人と職業を見たものであるが、本島以外の内地在住者は計70名に及び、表2の朝鮮、台湾、満州各地の合計数は、朝鮮70人、満州14人、台湾24人の計108人、そして、布哇・北米、南米在住者は、布哇（ホノルル50名、ヒロ25名）計75名、北米5名、ペルー1人で、男子人口数843人中の257人が国外へと越境移動している。この表からだけでは、荘年男子の越境率はわからないが、子どもの数の多さも推測すればその高さは予想がつく。

第2にその職業も注目される。前述のように沖家室島は漁業の島といわれるが、表1、2、3をとおして、商業を始め多種多様な自営業、スモール・ビジネスに就いていることが分かる。この点は、前述の、商業の島としての沖家室の社会的性格を裏付ける資料として興味深い。沖家室が移動の「磁場」を形成していたといえる所以でもある。

第3に、表3に注目した場合、本稿の立場からして重要なのが、沖家室出身者の越境者たちが、特に布哇ホノルルのダウンタウンの周辺のいわば「遷移地帯」あるいは「エンド」とでもいうべき、多民族集住地であるカカアコ地区に多く集住していることである。3.2において筆者は、事例として沖家室出身者であるM.O氏の『自伝』をもとに越境実践の「磁場」としてのダウンタウンの経験の仕方や利用の仕方、「遷移空間としての都市的世界」としてのカカアコ地区とアアラ街について触れるが、カカアコは、当時ホノルルに渡った人々にとって、移民局がある地域であり、寄り集まって住む移民コミュニティが形成されたエスニック・コミュニティ地区である。そこには、宗教施設や近接の地区には日本人学校が作られ、日本人のエスニックな居住地ができ、そのなかからダウンタウンの北側「アアラ街」で商業活動をする人々が出現し、ビジネス連合組織「アアラ連合」が作られ、この二か所が日本人の移動の磁場となっていくことが明瞭に描かれている。また、アアラ街は、耕地からの汽車が着く終点で交通機関の要所でもあり、ダウンタウンの中心市街地に隣接する「遷移地帯」として、日本からの越境者たちは、このアアラ街を磁場としながら布哇社会に適応する地位を築いていくことになる（後述）。

次に筆者は、日本人のグラスルーツな越境実践が「磁場」となる場所を繋いでどのように展開したかを「布哇沖家室人會」の設立の中に見、M.O氏の辿った軌跡を参考に越境経験が具体的にはどのように、そしてどのような舞台で展開したのか、移動中の磁場としてのアアラ街の「都市的世界」とはどのようなものであったか、越境者の場所への関わりの位相を見ていきたい。

### 3. ホノルル・ダウンタウンと日本人の越境実践

#### ——沖家室出身者の組織と『自伝』から——

#### 3.1 布哇ホノルルの遷移地帯アラア街、カカアコ地区と「布哇沖家室人會」の成立

本節では、沖家室出身者の国境を越えた移動の磁場としての布哇ホノルルにおける、グラスルーツな移動とネットワークの実態に焦点を合わせて、越境者にとっての出身地の場所と越境先の「都市的世界」の位相と、「場所とアイデンティティ」の位相について具体的に見ていく。無論、日本人の布哇移民史については蓄積が豊かである。ただ本稿では、あくまで「沖家室島」出身者に焦点をあわせ、彼らのネットワークや移民コミュニティがどこにどう形成されていたのか、そのコミュニティ形成や活動の磁場の「都市的世界」性とその利用の仕方に焦点をあわせていく。

日本人の布哇移民が正式には明治 18 年（1885 年）の官約移民から始まったことは前出のとおりである。特に山口県周防大島・沖家室への移民に焦点を合わせて布哇移民史を執筆した土井彌太郎によれば、布哇における日本人、日系人の在留人口について、下記のように示している（土井 1980：73）。ちなみに、下記の表の 1868 年の 153 人は、官約移民に先行する、いわゆる「元年者」の数値である

土井は、布哇移民と日本人・日系人社会の形成について、1.漂流民時代（1270 年～1867 年）——この時期は生活面では空白——、2.元年者時代（明治元年：1868～明治 17 年：1884 年）——元年者と漂流者の時代で日本人社会は作られていない——、3.官約移民時代（明治 18 年：1885 年～明治 26 年：1893 年）——いわば出稼ぎ時代——、4.私約移民時代（明治 27 年：1894 年～明治 32 年：1899 年）——まだ浮動的で米国への密航も多かった時代——、5.自由移民時代（明治 33 年：1900 年～明治 40 年：1907 年）——暫定的定住時代——、6.呼寄移民時代（明治 41 年：1908 年～大正 12 年：1923 年）——定住時代——、7.移民禁止時代（大正 13 年：1924～昭和 21 年：1946 年）——永住時代——に分けている（土井 1980：127-128）。地理学者飯田耕二郎は『ハワイ日系人の歴史地理』という著作の中で、米国センサスの 12 次（1900 年）、16 次（1940 年）そして第 20 次（1980 年）をもとに、「布哇における日系人の島・都市別人口の変遷」についてまとめているが、それによると、1900 年には 23381 人だったホノルル市の日本人人口は、ホノルル神室会が出来る前年の 1920 年には 24522 人（全人口の 29.4%）を占めている（飯田 2004：18）。

沖家室出身者をはじめとする布哇ホノルルでの越境実践の中心的な舞台としての「都市的世

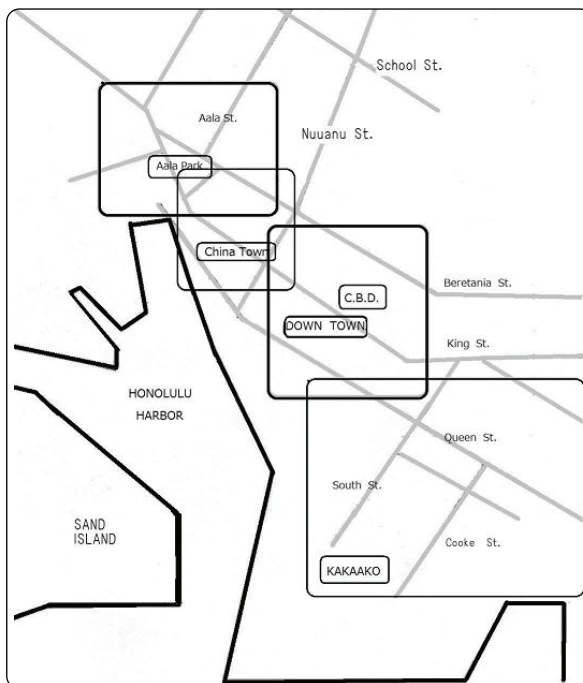
界」は、カカアコ地区とダウンタウン及びアアラ街であった。特にアアラ街はどのようにして日本人街となったのか。無論カカアコ地区は、前述の説明のように移民局の置かれていた地区であり、布哇に移住してきた外国人の多くが住む多民族地域であり、都市社会学的に言えば、ダウンタウンの南側に隣接するエンドないしは「遷移地帯」と言うべき地域にあった。多くの人はここを居住地として、ダウンタウンの北側の「遷移地帯」としてのアアラ街やベレタニア街で仕事をしていた。

居住地としてのカカアコ地区に比べ、より越境の時代の「都市的世界」性を発揮していたのはアアラ街である。筆者は2011年8月に現地を歩く

機会があったが、現在では「布哇出雲大社」を残して戦前のアアラ街の面影は全くない。ただ、日本人コミュニティの記録として、当時の日本人が営業する店や会社や劇場その他施設についてのインタビュー記録を交えながら当時のアアラ街について、*A'ala: the story of a Japanese Community in Hawaii*という本としてまとめたM.オキヒロ (Michael Okihiro) によれば、日本人官約移民が入った20世紀初頭ごろアアラ街は、ダウンタウンに隣接するチャイナタウンの一角にある、貸家や小さな商店が集まる地域であったという。しかし、1896年に「アアラ公園」がチャイナタウンの中に来れ、「自由移民時代」の日本人の商業者や貿易商の流入とともにアアラ街は日本人タウンとして発展を始めた (Okihiro 2003 : 7)。

M.オキヒロによれば、アアラ街は、「ホノルル港が移民の発着港であり」「しかもホノルルからパールハーバーへの玄関口」として、耕地からホノルルに来る「オアフ鉄道 (Oahu Railway and Land)」の終点として、「郊外の農地から汽車に乗って町場につく最初の地点」「交通の要所」としての役割を果たした (Okihiro 2003 : 10)。ここにはデリンガム・リリハ・キング・ストリートの交差点や、「ホノルルラピッド軌道電車」 (Honolulu Rapid Transit) の待合所やバス発着場があり、それはすぐ隣のダウンタウン (ビジネス地区) を繋ぐ場所であった。「アアラ地域は、

図2. ホノルル・ダウンタウンとアアラ街及びカカアコ地区の位置関係図



(筆者作成)

多くの日本人プランテーション労働者が町場への移住を求めた場所」であり (Okihiro 2003:10)、まさにアアラ街は「自由移民時代には商売や貿易をする多くの人々にとっての最初の場所になった。マイノリティ集団は、支配者たちによって占有されていたエリアの外側に、こぞってエスニック・エンクレープを作り、アアラ街は完全に低い家賃のエリア (low-rent area)」となった」 (Okihiro 2003:11)。

1900年のチャイナタウンの大火災によりアアラ街も一旦は焼失するが、「1920年代30年代にはこの場所は、活発で繁栄しエキサイティングな場所になり・・・商店や共通の文化的価値を持ち、情報を交換」する場所になった (Okihiro 2003:11)。都市社会学的に言えば、まさにここはいわばダウンタウンという中心ビジネス地区に隣接する「遷移地帯」としての役割をはたしていた。

だがここは同時に日本人のエスニック・コミュニティとして象徴的な場所でもあった。1909年の日本人耕地労働者の大ストライキ時には、アアラ街近くのベレタニア街の移民宿「山城屋」が、集結と討議の場所になった。当時アアラ街は、前述のように耕地労働者が日用品を買いに来、ダウンタウンの都会的雰囲気に触れるための交通の要所であったが、米国による穀物法の制定後、耕地労働者の身分を脱して、ホノルルで商売をしようとする日本人が集う地域になっていた (Okihiro 2003:10)。アアラ街はその意味では、日本人や中国人を中心に、エスニックマイノリティズがそれぞれ小さなエスニック・エンクレープを作っていた多文化の「都市的世界」である。

沖家室出身者は、「沖家室惺々会」を結成しつつ明治後期から布哇に大量に出稼ぎ移動を始めた。ちなみに『かむろ』第一号が発刊されたのが前述のように大正3年(1914年)であるが、それは、前述の土井の、布哇における日系人の移動と社会形成の時期区分に当てはめると、布哇の日本人が漸く「定住時代」に入った時期にあたる。実際、「沖家室惺々会」が結成された大正3年の「沖家室惺々会」規約には、地方役員(支部長)として、すでに、ホノルル支部長名八木原常助、幹事大谷松次郎、ヒロ支部長として北川磯二郎、幹事柳原良一、ラハイナ支部長として八木信三、クワイ浦支部長磯部平吉の名前が見え、その他に、国内の松山支部、朝鮮の仁川、鎮南浦、平壤支部、開城支部、安東支部等、海外に支部が作られてはいた(泊清寺編 2001:81)。そして、国外の沖家室出身者の移動の磁場・集住地に、各々の「沖家室人会」が作られてくるのが、それからしばらく経った、1921年(大正10年)前後である。

1920年の布哇の日本人人口は109,274人で、全人口に占める日本人の割合は42.6%に及んでいる (Okihiro 2003:7)。すでに、表1、表2、表3で示したように1921年(大正10年)の『かむろ』(第38号)に掲載された「沖家室惺々会」会員の越境移動と職業の多彩さは、漁業は主としていても、漁業の仲売りや鮮魚店や漁業会社の設立とそうした漁業をビジネスとして支え

る多様な職業技術を持った人々が越境移動をしていたことを示しているが、M.オキヒロによると布哇ホノルルにおいても1920年には、「野心をもった若い人々や年配の人々も、プランテーションや郊外の農業が提供する以上の何かを求めて、オアフ郊外から都市ホノルルに流動した」と記している（Okihiro 2003 : 7）。そしてこのころアアラ街に、「アアラ・マーケット」が作られ、日本人の店が入るようになる。

布哇の沖家室出身者の間に越境の同郷人組織「布哇家室人會」がつくられたのは、まさに、1921年（大正10年）の3月21日であった。下記は、大正10年6月の『かむろ』第38号に掲載された「ホノルル在留沖家室人會會則」である。少し長いが、その目的を知るために重要な資料なので下記に掲載しておく（原文のママ）。

- 第一條 目的 本會はホノルル在留の沖家室島出身同胞の福祉と親交とを増進するを以て  
目的とす
- 第二條 名称 本會は「ホノルル在留沖家室人會」と稱す
- 第三條 事業 本會の事業を分かちて次の四項とす
- 一、在留同胞の行動を統一せんことを計る
  - 二、經濟上の乱費を取締る
  - 三、會員相互の保護救助を計る
  - 四、其他本會の目的を達するに必要な事業は細則を以てこれを定む
- 第四條 組織 本會會員は沖家室出身にしてホノルルに在留するものに限る
- 第五條 経費 本會の目的及事業を遂行するために會員は月額壹弗納付す但し集金及預金  
方法は細則を以て之を定む
- 第六條 會合 本會は毎年一月に總會を開く總會決算報告及役員選舉を行ふ、役員會は随  
時之を開き又必要に應じ臨時總會を開くことあるべし
- 第七條 役員 本會役員は一月の總會に於いて之を選舉し任期を一箇年とす但し再選を妨  
げず、而して役員員の員数及び職務左の如し
- 一、理事六名 別に當選理事中より専務理事二名を互選す理事は本會々務を處理す
  - 二、會計一名 本會出納事務を掌る
  - 三、監査二名 會計の監査並びに會全部の監査を行ふ
  - 四、書記一名 會務の極に當り記録を掌る
  - 五、評議員若干名 役員の推薦によりその職務は所管地方の會費を徴し且つ會務を評  
議す
- 第八條 補則 本會會則にして改正の必要ある時は總會にて之を議し出席會員の半数以上

の賛成者或時は決議に隋ふものとす

第三條の「事業」の項に示されるように、「ホノルル在留沖家室人會」が、基本的には、「經濟上の乱費を取締り」、「在留同胞の行動を統一せんことを計る」とあるように、当時の時代背景のなかで「共同体」の綱紀肅正という目的を掲げていたことがうかがわれるが、しかし同時にこの組織が「會員相互の保護救助を計る」とあるように、きわめて日常的な生活上の問題解決を目指して作られているところが注目される。例えば、細則には、特に第6条の一として、「會員に不幸がある時の見舞金」、5に「會員中ノ漁業家ニシテ出漁中災害起コリシ時ハ役員會ヲ開キ相談ノ結果相當ノ補助ヲナス」とあり、これが親睦、相互扶助組織、保険団体、ビジネス支援組織として機能していたことがわかる（沖家室惺々會編 1921：14 - 15）。

このように「定住時代」を迎えた布哇において、日本人のグラスルーツな越境実践は、アアラ街やカカアコという都市的な場所を磁場として、そのいわば「越境の都市的世界」のなかで展開されていくことになる。本稿では特に、ある沖家室出身者個人の越境実践を追いながら、越境の都市的世界での生き方を、「場所とアイデンティティ」に注目しつつ見ていこう。

### 3.2 日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと越境者の「都市的世界」

#### —ある越境者の足跡から見る「都市的世界」アアラ街とカカアコ地区の場所の獲得—

繰り返すが本稿の目的は、越境移動者による「都市的世界」の意味、「場所との関わり方」の具体的な位相を、沖家室からの人々の越境を手がかりに考察することにある。本稿では、初めに、越境移動が、国家的目標のもとで展開された当時の時代背景について触れてきた。ここでは沖家室出身のM.O氏の『自伝』をもとに、彼の越境の動機がどのように形成され、実際にどのように移動したか、現地ではどのようなネットワークが利用可能であったか、出身地（origin）との結びつきの位相はどうかといった諸点を分析の手掛かりにしながら、移動の磁場としてのカカアコやアアラ街の「都市的世界」としての意味、について見ていきたい。

ここで日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム経験を象徴するドキュメントとしてM.O氏の自伝『わが人となりし足跡』（大谷 1971）を選んだのは、本研究において筆者が幾度か沖家室を訪ねている過程で、同氏の姪にあたるR.O氏にインタビューし、さらにその関係で2011年の8月末に、同氏のご子息にあたるA.O氏——ホノルル在住：M.O氏が創設した水産会社を更に発展させている——とそのご家族を訪問したという事情にもとづく。M.O氏の軌跡そして彼のご子息の経験と沖家室との繋がり、日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムを考える一つの手がかりになる。本書は総頁数180頁に満たない小冊子であるが、生き生きと明治末期（1908年）から戦後までの、沖家室出身者の越境実践と「場所の獲得過程」が

示されている。そして、4で筆者は、現代に生きる、日本人の初期グラスルーツ・トランスナショナルリズムの位相と彼らの生き方が「場所とアイデンティティ」の関わりをなかで展開していることを考察していきたい。

『自伝』によると M.O 氏は、明治 24 年（1891 年）に沖家室島に生まれた。高等小学校を 13 歳で退学した M.O 氏は、16 歳のときに移民を決意する。その『自伝』に「僅か十六歳の少年の幼稚な頭にも海外雄飛が念頭から離れず」と記されているように、渡米熱、海外雄飛熱がこの小さな島の少年に影響を与え、布哇移民「苦学」の先の将来に向けての希望を掻き立てていたかがうかがい知れるが（大谷 1971：3）、ただ同時にこの動機はあくまで実利的な計算に裏付けられていたことにも注意しておきたい。例えば M.O 氏は、初めは朝鮮への出稼ぎを夢みて、開城で成功した父の友人に話を聞くが、同地での出稼ぎが思ったほどでないのに失望し、むしろ、当時布哇ヒロで漁業関係の商売をしていた北川磯治郎の話に将来性を見つけて布哇への移住を決意する（大谷 1971：2-3）。実際の移住が、海外雄飛熱に冒されて実現されたのではなく、あくまでも日常的な生活の次元での実利的な計算から生み出されているところに注目しておきたい。

実際の移住の手続きはどのようにとられたか。M.O 氏は、まず周防大島・沖家室島の入り口の街である柳井市の「防長移民会社」に手続きの申し込みに行く。だが独身者は扱わない（リベートが上がらない）という理由で断われ、当時、「力行会」の総帥として東京博文館の外国渡航係をしていた嶋貫兵太夫に直接質問状を送り、アドバイスを受け、移民会社には三人分の手数料を支払うことで布哇渡航の申し込みが成立する（大谷 1971：5-7）。ここでは、当時 17 歳になるかならないかの沖家室島の 1 小年の行動力、実践力とともに、「磁場」としての沖家室が「都市的世界」との繋がりにおいて成立していることについて注目しておきたい。

年が明けて 1908 年の 1 月 1 日に M.O 氏は、それまで準備をしていた渡航に必要な品々や手続きを確認し、神戸市栄町三丁目の移民宿「岩国屋」に移るが、ここで、「布哇移民本年度より渡航禁止」すなわち、自由移民時代の終焉を知ることになる。ただし、自身は前年の 12 月までに手続きを済ませていたため、最後の自由移民として布哇渡航に滑り込みで許可が出される（大谷 1971：15）。移民宿の「岩国屋」では、「身体検査、目の検査、外国領事館などを回り汽船の入港を待つ」ことになった（大谷 1971：15）。当時「移民宿」がグラスルーツな越境移動を支える「施設」「装置」であった。M.O 氏は、まさに自由移民時代が終息するぎりぎりの明治 41 年 1 月に滑り込みで渡米した。前出の土井の時期区分によれば、それは布哇の日系人社会がまだ「暫定的定住」の時代であった



移民船「香港丸」は、1908年1月24日の朝にホノルルに到着する。イミグレーション検査で疱瘡患者が同船していたのが原因で、M.O氏は、ホノルル・サンドアイランドにある医療施設に2週間滞在したのち、カカアコの移民局に行き、そこで許可を得てようやく布哇へのイミグレーションが認められた。

『自伝』によればM.O氏は、とりあえずの身の落ち着き場所として大島久賀町出身者がダウスタウン・ベレタニア街で経営していた移民宿「川崎旅館」を選んだ。氏はここを拠点に、アラケア街の口入屋（職業周旋所）の「鈴木口入所」に行きヤードボーイの職を得るが、しかし翌日には沖家室出身者の、ある人物が早々と同氏を訪ね「カカアコには同郷の家室のものがたくさんいるから、当分くるがよい」（大谷 1971：19）と告げられ、三人同居でカカアコの下宿屋に移っている。

住処をカカアコに求めながらM.O氏は、ダウスタウンのベレタニア街の英語学校に行き、これもダウスタウンのヌアヌ街とスクール街で週七ドルのヤードボーイをする。ただし、英語学校については当時カカアコ・サウス街の浄土宗開教院（沖家室泊清寺と同宗派）でやっていた夜学に通うことになる。「浄土宗開教院（別院）」では、「ベレタニア街角の町田薬局とカカアコ『長ハウスキャンプ』前の二か所で……野外布教」が行われており、沖家室出身者にとっては、特に浄土宗別院は、沖家室島の泊清寺と同じ宗派であるため、同氏も、野外布教時の「トーチボーイ」をすることになった（大谷 1971：21-22）。

ちなみにM.O氏は多くの仕事に就いたが、ダウスタウン・ホテル街とヌアヌ街角の山本商店にも沖家室出身者を介して仕事をしている。また、マウイ島のラハイナ柳原商店（沖家室出身者）でも、一時、仕事をしている。M.O氏は、沖家室出身者の妻を迎えている（大谷 1971：34）。

M.O氏が布哇ホノルルの地を踏んだのは1908年であるから、先の時代区分によれば暫定的定住時代と定住時代の過渡期にあたる。だがすでに、上記の記述からは、寺院や教会、英語学校、日本語学校、移民宿、口入所、商店等をネットワークの「結び目」とする沖家室出身者のいわば「日本人のエスニック・ネットワーク」が、カカアコ、ダウスタウン・ベレタニア街、ホテル街、ヌアヌ街、そして布哇他島の場を舞台としつつ形成されていたことがM.O氏の行動をとおして見えてくる。すでに筆者は、カカアコが、沖家室出身者が多く住んだ地域であると述べてきた。表3においても、記録としては不完全ながらホノルルの沖家室出身者の多くが、「柳原常助商店」を気付けとしていた。M.O氏の『自伝』には、カカアコにいた沖家室出身者のうちで、「記憶に残っている人」として、42名の沖家室出身者の名前が挙げられている（大谷 1971：31）。

その後のM.O氏の活動も、このネットワークに寄り添いながら展開する。実際、前述のよう

に布哇に渡って6年後の1914年には、「沖家室惶々会」布哇支部の幹事になっている。

M.O氏はもう一方の活動の磁場としてのアアラ街にはどのように関わったか。M.O氏は、マウイ島ラハイナの柳原商店での鮮魚の行商生活を1911年には切り上げ、ホノルルに戻ったがそれは、ホノルルで「魚仲買人」になるためであった。M.O氏は、再び、カカアコ・マミオン街に住居を据えながら浄土宗別院の夜学で英語を学び、1911年2月(明治44年)にケカウリケ街に「布哇漁業株式会社」が設立され同時に「キング魚市場」が開店したのを機にM.O氏は、「布哇漁業株式会社」の最初の店子として、18歳でまず「大谷鮮魚店」を開店した(大谷 1971:33)。

M.O氏とアアラ街との本格的な関わりは、1918年の「アアラ・マーケット」の建設がきっかけであった。M.O氏は「アアラ・マーケット」の建設に伴い、アアラ魚市場に「O鮮魚店」を移し、1920年には、「呼寄せ」で布哇に来た弟と合資会社「O商会」を作り、日本の缶詰会社(大洋漁業)との契約、蒲鉾製造、米国軍部への缶詰納入へとビジネスを拡大した(大谷 1971:37-48)。ちなみに蒲鉾製造所は、初めは1929年に「アアラ市場」内に工場を建て、カカアコの住居の近くに倉庫を建てるにいった。

実際、アアラ街が特に沖家室だけではなく日本人越境者の「場所」として異彩を放ったきっかけは、1918年の「アアラ・マーケット」の設立であった。ただ、「アアラ・マーケット」は、布哇で最初の鮮魚のオークション、漁業関連会社の特別区であったが、その後、ここを中心に日本人の多様な商店が結集し、1930年に、日本人商店主からなる「アアラ連合」(＝アアラ・ショッピングセンター)が結成され、この「アアラ連合」の成立によってアアラ街は完全に日本人のコミュニティになる(Okihiro 2003:7)。「アアラ・マーケット・プレイス」には、キング街に面している「アアラ連合」だけをとり、家具、テイラー、グローサリー・ストア、洋服店、レストラン、輸出入会社、宝石店、菓子製造販売、ドラッグストアなど19店が並び、そこは、まさに「商店や共有の文化的価値が集まり、様々なアイデアや情緒を交換する」場所であった(Okihiro 2003:11)。

ちなみに筆者は、2010年8月に、アアラ連合組織の理事長を務めた佐藤布地店の佐藤雅之氏(その妻はリリハ街で「洋装学校」を経営していた)の奥の娘に当たる方(現周防大島在住)にインタビューし、当時の写真や資料を拝見したが、「アアラ連合」は、日本人商店街連合会として、日本人商店主や家族のピクニックや運動会を通じて、日本人コミュニティの中心でもあり、日本人としての“意識”を涵養する場所でもあった。

M.O氏はその後同マーケットの理事を務めるが、開戦の状況下で一時的にアメリカ側に拘束されることになる。

#### 4. 越境の都市的世界と「場所との繋がり、場所の獲得」

##### ——中間的考察として——

さて、ここまでのところから本稿のテーマに関連して読み取れることは何か。

最後に筆者の、沖家室やO氏ご家族その他の方々からの聞き取り調査や資料を中心に、沖家室とホノルル・アアラ及びカカアコを事例にしながら、移動の「磁場」で生きるとは何を意味するのか、越境者にとっての「都市的世界」とは何か、について中間的な整理と問題提起をしておきたい。

まず、移動の磁場に生きる人々を「場所」との関わりにおいて探る意味は何か、という問題について筆者の考えを述べて行きたい。この問題は、越境する人々のナショナル・アイデンティティあるいはナショナリズムとは何か、という問題とも関わってくる。

布哇の日本人、日系人にとっての“日本人”としてのアイデンティティの涵養という問題については、「アアラ連合」と並んで重要な役割を果たしたのがアアラ街の映画館であったことが指摘されている（権藤 2007）。特に第二次世界大戦に突入したあとは、アアラ街の映画館は、繋がりが絶たれた後の“日本文化”を追体験するための場でもあった。別稿で筆者は、初期トランスナショナリズムの用語を使用したR.ウエダの論文を紹介したが、その中心的施設として映画館が取り上げられている。前出のM.オキヒロ氏によれば、アアラ街における劇場の歴史は古く、1900年にはすでに「Asahi Theatre」、1903年には「ホノルル劇場 (Honolulu Theater)」が、1920年には「日本館 (Nihon-Kan)」、1928年には「オアフ劇場 (Oahu Theater)」、1936年には「公園劇場 (Koen Gekijo)」などが設立され、日本から多くの俳優、音楽団が呼ばれた (Okihiro 2003 : 35)。前出の R.ウエダによれば、ここは、戦争で交流を断たれた出身地日本と移動先のアメリカを繋いで生きようとする日本出身者の“記憶としての日本”を体験する象徴的な場所となった。

M.O氏の『自伝』には記録されていないが、この意味で、日本人の「ナショナリズム」の涵養に在って「アアラ街」が特定の役割を担ったことについて注目しておかなければならない。

だが涵養されたのは、「国家への愛着」と言う意味での“ナショナル・アイデンティティ”だったのだろうか。そしてアアラ街は、そのための場所だったのだろうか。

布哇日本人・日系人の「ナショナリズム」の位相を考える上で、帰化訴訟問題についても若干触れておきたい。戦中を別にすれば、この時期布哇日本人・日系人社会の論争のもとになった大きな事件の一つとして、いわゆる「小沢帰化訴訟事件」がある。この裁判は、いわゆる「帰化不能外国人」としての立場に置かれた日本人の国籍取得運動として有名であり、1914年に小沢孝雄氏がホノルル連邦地裁に帰化申請手続きを行い、結果として1922年に連邦最高裁による

「日本人には帰化権なし」の判定が下された事件である。当時の日本人の論調は、それを時期尚早とみなすものとそうではないものに分かれたというが、筆者には「今日風にいえば・・・日本の優れた文化や風習は残したまま、米国社会の完全なる一員になるという考えが、すでにこの時期（1915年）に（「布哇報知」の社説として）打ち出されている」との指摘が興味深い（布哇報知 1987：94-118）。

もうひとつ指摘したい。布哇の日本人の労働問題をめぐる動きである。例えば布哇の日系人労働問題は、耕地労働の待遇をめぐって1909年と1920年の二回、大きなストライキを起こしている。「布哇報知」によれば、「1909年のストライキは、日本人ナショナリズムに発動したもので、他人種と同等の待遇を求めたところに増給要求の根拠がおかれたのだが、1919年夏の『報知』の主張は、資本家に当然労働者に分けられるべき利益の分配をよこせと迫るもの」だったとの指摘がある（布哇報知 1987：165）。もちろん、1909年の耕地ストライキと1920年のそれとは、文脈が異なる。前者のそれは多民族と比べて日本人労働者の賃金問題の低さにだけに目が向けられ、後者のそれは、第一次大戦が勃発して1、2年後の1915、6年ごろの砂糖値段の騰貴という世界的経済事情の変化のなかで、布哇の人種民族を構成する多くの人々を巻き込んだ労働問題という違いがある。

ここで注目されるのが1916年における「棧橋スト」での多民族間共同戦線を求めた労働運動である。「棧橋スト」とは、棧橋従業員のストライキであるが、その従業員の多くは日本人の理髪店、雑貨小売店、水店、酒場などで働く地元の布哇人で、人種、民族の壁を越えて労働者としてのストライキを目指したものであり、「布哇報知」はこの棧橋ストを布哇労働運動の一大転機としている（布哇報知 1987：146）。ちなみに1909年の耕地労働の賃金増要求ストライキと1920年のそれは、フィリピン人を巻き込んだストライキであった（Okihiro 2003：7）。

前出の成田龍一は、当時の日本の国民国家体制の特徴として「われわれ/かれら」の選別が軸になっていると指摘している。だが、越境の「都市的世界」にあって、当初はそうした“日本人の共同性”を軸とした結びつきも、あるいは日本人のナショナリズムの発動と取られかねない運動も、いわば日常生活の重みのなかでは、単体としての日本人のアイデンティティを主張するというよりは、越境の場での結びつきを重視するという状況的アイデンティティの発露という点に注目したい。実際、1909年のストライキの際は、ベレタニア街「山城屋」が根城であったが、「棧橋スト」では、「アアラ公園」がそうした結びつきの場所となった。アアラ街は、日本人ナショナリズムを喚起する場所というだけでなく、多文化が接触し、衝突し、そこにある種の境界領域が出現し、互いの場所をめぐる政治とアイデンティティの交渉が行われる越境の「都市的世界」であったと筆者は推測する。

注 6) で示したように、この当時、アメリカ本土の東海岸では、特にニューヨークにあって

は、ビジネスマンたちを中心とする日本人コミュニティが成立し、「紐育日本人会」や親睦団体の「日の出俱樂部」、『日米週報』などのコミュニティ新聞ができていた。だが、帰化権取得やカナダでの土地収用などに対する『日米週報』などの主張に見られるのは、過激なナショナリズムの展開というよりは、むしろ、出身の場所に繋がりを持ち、新たな場所の獲得を目指し、多民族を巻き込んだ越境者としてのトランスナショナリズムの過程——適応、共生、アイデンティティの交渉と承認——のように見える<sup>8)</sup>。

越境の時代の「場所へのアイデンティティ」の諸相を研究することの意味として筆者は、「ナショナリズムの発露」と言うよりは、日常生活の重さのなかで、越境者が自らの生きる「場所」の獲得過程としてもっと論じても良いのではないかと考える。そして越境の時代における「場所」とは、当時のアアラやカカアコが「遷移地帯」であったことに象徴されるように、そこは、ある種の「境界性」を出現させる「都市的世界」であり、越境者のナショナル・アイデンティティが一方向的に通用する場所ではない。本来的な意味での「共生」の過程も、一方においての出身地の「場所」との繋がりの中で、越境の「場所」の獲得と交渉過程の方法として理解されなければならない、というのが本稿の事例をとおして改めて提起される。越境の時代の都市的世界そして越境者の「ディアスポラ」研究の位相もここに見えると筆者は考える。

## 5. 終わりに

本稿では明治後期から昭和初期までの時期に限定して描いた「布哇沖家室人會」も、その後2010年まで続いた。そのつながりは、布哇浄土宗別院を中心に親睦、相互扶助組織として機能していた。戦後には、沖家室の泊清寺と布哇浄土宗別院が媒介となって二つの「場所」の人々が出会う試みがあった。筆者が布哇浄土宗別院に聞き取り調査を行った2011年8月には、移民一世の中心人物のA氏の他界とともに終了したが<sup>9)</sup>、その繋がりには現実として残っている。「布哇沖家室人會」のメンバーでもあり、M.O氏のご子息のA.O氏は、布哇日系人2世として地元のマッキンリー・ハイスクールを卒業しハワイ大学に入りアメリカ軍に入隊し、戦後の物資難の折に食料を沖家室に大量に送った<sup>10)</sup>。聞き取り調査のなかで同氏は、アメリカ人として生きながら同時に、現在でも沖家室に父親の家と土地を手放さないでいる。親戚で沖家室在住のR.O氏によれば、その地所の一部が崩れた際には、A.O氏から数十万の修理費が送られてきたという。

国内の「かむろ会」自体は、現在でも依然として続いている。筆者の「関西かむろ会」会長への聞き取り調査によれば、特に大きな組織である「関西かむろ会」の場合、戦後昭和24、5年ごろに、沖家室出身で阪大の医学部を卒業し東成区で病院を開業していたK氏を中心に、沖家室出身者の就職や居住地のサポートをし、親睦を図る繋がりとして新たに結成されていた。そ

のつながりは、沖家室中学校を卒業した同窓会的繋がりであった、といわれている<sup>11)</sup>。

前述のように、本稿で資料として使用した雑誌『かむろ』の内、復刻されていない分は、東京大田区鎌田に仕事場を持っていた、元「東京かむろ会」会長のS.Y氏（故人）及びご子息からお借りしたものである。「東京かむろ会」もまた、戦後まもなく、このS.Y氏とN氏を中心に、沖家室出身者のプライベートな繋がりとして発足した。紙幅の関係で詳しい設立状況とその後の活動状況については本稿では省略するが、関東につくられている大規模な郷友会である「東和町人会」や「防長倶楽部」「山口県人会」とはまた別の役割を持っている。

「東京かむろ会」の場合、現在の会員は、沖家室出身者1世は少なくなり、2世以降の人々の沖家室への沖家室という「場所の記憶」とおした繋がりとして、アイデンティティを確認する会となっている。ちなみに、布哇との結びつきというなら、多くの会員が今でも布哇に親戚を持つ。現「東京かむろ会」会長のY氏も同様であり、その親戚にあたるD氏（米国籍）はアメリカから日本の大学で講師として働いている。

「かむろ会」の繋がり「場所」への繋がり維持している要素は何か。筆者は、第1に、個人的にきわめて強い主体性のもとに状況を工夫しながら乗り切る実践性に富んでいたことを指摘したい。それが、狭隘なナショナリズムとは一線を画してトランスナショナルな場所との繋がりをつくっていた。それは国家というよりは自らの生活の「場所」と「記憶された場所」へのアイデンティティを生み出した。

布哇に移住したM.O氏だけではなく、筆者は、「関西かむろ会」に出席した折、沖家室から台湾に渡り国鉄に入り、朝鮮で繊維会社の社員として活動したH氏の履歴とノートをご家族の方からお預かりし、まだきちんと読み込みができないているが、その経緯を見ても、雑誌『かむろ』が目的とした人材養成の思想が日常のなかで解釈され実行されている<sup>12)</sup>。

しかしながらこうした繋がり、単に、記憶としての繋がりや郷愁だけでは維持できないことについても指摘しておかなければならない。沖家室は、いずれ出ていかざるを得ない「場所」であるが、その「場所」に引きつける社会的装置があった。その一つは、媒介となる手段の存在である。例えば、沖家室に人々をひきつける「磁力」が、コミュニケーションの媒体としての雑誌『かむろ』が機能していたこと、現在でも泊清寺を通じての『かむろ』の復刻や、地域大学活動があること、沖家室に地所をのこしている人々への町内会の働きかけがあること、そしてそれが『かむろ』に見られたような秩序感覚の醸成をとおして維持されていることが挙げられる。その繋がり、鍵は、誤解を恐れずに言うなら、外に押し出す「現実」と繋ぎとめる「拘束」であり、「場所との関わり」は、一方では主体性をもって状況を切り開く日常実践そのものを主張するものとして機能し、他方では、その場所を出ることが運命づけられたことによる関わり、強さを醸成するものとして機能した。

そしてその主体性と場所への拘束性にリアリティを与えたのが、越境空間もしくはクロスロードとしての沖家室と布哇の「都市的世界」性であったと筆者は仮定したい。越境の時代の都市的世界像とは、越境や境界性を支える場としてのそれである。そして「遷移地帯」は、越境や境界の出現の一つの磁場でもある。初期シカゴ学派の E.W.バージェスは、都市社会学における古典的な論文のなかで「遷移地帯」について、犯罪や悪徳に満ちた空間であると同時に、創造的で反逆的な精神が滞在する場所として扱っている。こうした悪徳、創造性、反逆性は、ヨーロッパからの大量で多様な移民がシカゴに流入し、彼らの民族的・文化的異質性がシカゴの都市的世界に出現させた越境性と境界性が引き起こす現象でもある。

沖家室から布哇移住者、越境者に学ぶべきことは、外に開く実践とグラスルーツなレベルでそれを支える越境の都市的世界の存在であったと筆者は考える。

本稿は中間的な研究報告であるが、これを一応の結論としておきたい。

**\***本稿での布哇における沖家室出身者の越境実践と磁場としてのアアラ街、カカアコ地区に関する記述は文部科学省科学研究費「基盤研究 (C)」 「日本人のグラスルーツ・トランスナショナルリズムと場所」 (課題番号 22530569 : 平成 22 年度~24 年度) の助成を受けており、沖家室出身者の越境実践と「かむろ会」に関する記述については平成 22 年度専修大学研究助成「石巻・周防大島の移民に見るトランスナショナルリズムに関する研究」の助成を受けている。

**[謝辞]** 本稿を執筆する上で筆者は、沖家室関係者の方々大変お世話になっている。泊清寺住職新山玄雄氏、「関西かむろ会」会長宮本富行氏、「東京かむろ会」会長八木正共氏、「沖家室自治会長」叶井宏和氏、大谷亮子氏、ホノルル在住の大谷明氏、ホノルル・マキキの「浄土宗別院」檀芝裕文氏、日本文化センター、「小林エージェンシー」、そして複製板にはなっていない『かむろ』に関しては、山田重利氏 (故人) とそのご子息である山田松重氏とご兄弟・姉妹に大変お世話になった。特に、山田松重氏とご兄弟の皆さまには、八木氏の仲立ちのもとで、重利氏が亡くなられた直後に、重利氏が所像していた沖家室関係の資料を研究のためにと快くお貸しいただいた。この資料がなかったら本稿は執筆不可能であった。また、関西かむろ会員の奥村範子氏にお礼を述べたい。本稿では紙幅の関係でそのすべてを理解し、発表することは叶わなかったが、本稿の家室関係の記述はひとえに以上の皆さまのご厚情におっていることを明記し、感謝の意を表したい。

[注]

- 1) 筆者が 2011 年 7 月 30 日に沖家室自治会長の K 氏に行ったインタビューによると、現在、沖家室漁業組合に登録されているのは、正組合員 10 名、準組合員 20 名であるということであった。
- 2) 安井論文では昭和 5 年の『かむろ』85 号（沖家室惺々会編）を資料として、沖家室職業記載は、311 軒で、そのうち漁業は 213 軒で圧倒的に多く、続いて農業 17 軒、大工・船大工 11 軒、穀物商 10 軒、漁商 8 軒、雑貨商 4 軒、旅館、醤油製造、菓子製造、酒店、豆腐店が各 3 軒、釣り具店、紺屋店各 2 軒、そして呉服店、瓦製造、売薬店、運送業等々が一軒ずつで並んでいる。
- 3) 吉見俊哉は都市の定義として中心性と同時に情報の媒介性、を挙げている（吉見 1987）を参照。
- 4) 筆者が 2011 年 7 月 30 日に沖家室自治会長の K 氏に行ったインタビューによれば、沖家室の世帯数は前出のとおり 115 世帯ということになっているが、その他に、すでに島外に出て、空き家になっている戸数が 50 件近くあるということであった。空家の補修も通常は盆踊りの時期に行われるといわれているが、島外にあって自治会費を納入している人が空き家 50 軒中の 10 軒であった。自治会費は年間 6000 円（月 500 円）である。自治会役員は、10 人程度で、本浦の南区、中区、峠（たお）区、須崎の狩山区、岡区、鼻区から選ばれる。なお、現在の居住者は、一人暮らしが多く、ほとんどは、東和町の福祉課の世話になっているが、沖家室の民生委員や福祉委員が細かく見回っている、ということであった。
- 5) 筆者は、たまたま宮城県石巻市で江戸時代以来廻船問屋として栄えた旧家本間家の本間義兵衛氏のアメリカでの労働移民について調べたことがあるが、彼も M.O 氏が渡布した同じ年（1908 年）に、早稲田大学を中退してアメリカ本土に渡るが、その渡航の前に横浜で嶋貫兵太夫と面会している。本間義兵衛氏は、郷里石巻に帰り石巻市議会議長を務めるが、彼は、町田の分類で言えば②資力のある、非国家・反国家型にあたる。本間義兵衛氏の日記には、社会改良主義的な文章や朝鮮半島における民族自決に対する称賛の文章も見える。この日記は、孫にあたる本間英一氏によって、本間義兵衛『出稼ぎアメリカ明治日記』（無明舎、2006 年）としてまとめられている。
- 6) 紐育日本人会編『紐育日本人発展史(1)』によれば、特に日露戦争以後の米国東海岸のニューヨーク（ボストン、フィラデルフィアを含む）には、男子 2992 人、女子 200 人程度の日本人人口が住んでいたと記録されている（紐育日本人会編 1984=1934 復刻版：365）。紐育日本人会の調べによると、日清戦争後の在留邦人の職業は約 20 種類で、明治 9 年に佐藤百太郎が貿易会社を設立するために行って以後「森村ブラザーズ」の設立等貿易業が主とす



るも、「旅館経営者、医師、新聞記者、植木職、彫刻家、書家、牧師、写真師、看護婦、日本人教会（1899年）等の職業に従事する者が生じる」にいたる程度であったが（紐育日本人会編 1934:383）、日清戦争後から徐々に増加し始め、雑貨小売り、公園事業（露天商）、裁縫業、移民下宿（移民宿）、料理業等々を中心に増え始め、1900年には、コミュニティ新聞である『日米週報』社が設立、1910年には『紐育新報』などが設立された。1907年には「日本人共済会」が設立され、「日米週報」社主や旅館業主、医師らが中心となり会員の相互扶助、墓地等の購入等を行い、1914年にはこの「共済会」を土台に「日本人会」が設立された（紐育日本人会編 b 1920=1984 復刻版』:436-448）。また、1904年には「紐育大学同窓会」、「紐育日本人宿屋組合」（1916年）等々が出来上がる。またこのほかにも、親睦団体の「日の出倶楽部」など1897年にすでにできあがっていたが、1901年により公的な団体に組織替えをし、コミュニティの体裁は整っていた。

- 7) 藤崎三郎助は、明治39年にブラジル・サンパウロ市サンベント街に陶器、玩具、扇子等を主な営業科目として販売する「藤崎商会」を作った。
- 8) 東海岸における日本人社会と米国社会との関係について紐育日本人会編『紐育日本人発展史（1）』には、「欧州大戦の終局に望み・・・紐育方面の米人の暗流は意外に急変の傾向を示したれ共、在留 邦人社会それ自体に対しては特に何等陰悪の感情を湧起せしむるにいたらざりき」（紐育日本人会編 1986:365）とある。ただし、『日米週報』を見ると、越境者としてのアイデンティティの承認を要求する記事が多くみられる。
- 9) 「布哇沖家室人會」は2004年現在で、二世を中心に約70名の会員がいた。その会長を長く務めたT.アオキ氏（故人）は、戦後も1972年以来5回日本を訪問している（読売新聞社 2004）。
- 10) A.O氏は、現在、United Fishing Agency, LTD. をフィッシング・ビレッジに置いている。
- 11) 2011年7月に行った筆者の聞き取り調査による。
- 12) H氏の移住の過程と布哇との関連については、2010年6月に開催された「関西かむろ会」で、そのご家族のO氏のご好意で写真その他の履歴をお預かりした。本稿では、詳しく触れることが出来なかったが、別稿にて触れる予定である。

#### [文献]

ベフ, H, 2006, 「グローバルに拡散する日本人・日系人の歴史とその多様性」ヒラバヤシ・レイ  
ン、リュウ・アケミ、キクムラ・ヤノ、ヒラバヤシ J. A 『日系人とグローバリゼーション』人文書院

- Burgess, E W, 1925, “The Growth of the City” =松本康訳「都市の成長——研究プロジェクト序説」
- 松本康編『都市社会学セレクション I 近代アーバニズム』日本評論社 2011 年)
- 土井彌太郎, 1980, 『山口県大島郡 ハワイ移民史』マツノ書店
- 『藤崎三郎助』
- 権藤知恵, 2007, 「ハワイ日系コミュニティにおける日本映画の経験」米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動』人文書院.
- 泊清寺編 (新山玄雄編), 2001, 『かむろ復刻版 第一巻』みずのわ出版
- 布哇報知新聞社編, 1987, 『ハワイ報知 創刊七十周年記念誌』ハワイ報知新聞社
- 布哇浄土宗教団本部編, 1934, 『洋上の光』布哇浄土宗教団
- 広田康生, 2006, 「テーマ別研究動向 (移民研究)」『社会学評論』57 (3)
- 広田康生, 2011, 「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所への都市社会学的接近」『専修人間科学論集』Vol.2, No.2.
- 本間義兵衛, 2006, 『出稼ぎアメリカ明治日記』無明舎
- 飯田耕二郎, 2004, 『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版
- 香山六郎, 1976, 『香山六郎回想録』サンパウロ人文科学研究所
- 町田祐一, 2010, 『近代日本と「高等遊民」—社会問題化する知識青年層』吉川弘文館
- 長沢倉吉編, 1932, 『藤崎三郎助』藤崎三郎助傳編纂会
- 永田 稔, 1942, 『国見する者』日本力行会出版部
- 成田龍一, 1994, 「『少年世界』と読書する少年たち—1990 年前後、都市空間のなかの共同性と差異—」『思想』No.845.
- 紐育日本人会, 1984, 『紐育日本人発展史 (1)』(大正 3 年版の復刻) PMC 出版
- 紐育日本人会, 1986, 『紐育日本人発展史 (2)』(大正 10 年版の復刻) PMC 出版
- 森本孝・須藤護・新山玄雄編著, 2006, 『沖家室 瀬戸内海の釣り漁の島』みずのわ出版
- 宮本常一・岡本定, 1982, 『東和町誌』山口県大島郡東和町
- 宮本常一, 1984, 『忘れられた日本人』
- 沖家室惺々会編, 1921, 『かむろ』1 月号
- 沖家室惺々会編, 1921, 『かむろ』7 月号
- Okihiro, M (ed.), 2003, a'ala: the story of a Japanese community in Hawaii. Hawaii Hochi.
- 大西理平, 1933, 『村井保固傳』村井保固愛郷会
- 大島町誌編纂委員会編, 1959, 『周防大島町誌』周防大島町役場
- 大谷松次郎, 1971, 『わが人となりし足跡』文洋社
- 島貫兵太夫 (相沢源七改稿), 1980, 『力行会とは何ぞや』宝文堂

安井真奈美, 2010, 「故郷の民俗」山口県編『山口県史 民俗編』山口県  
読売新聞社, 2004, 「特集 かむろのハワイの絆」①『読売新聞』(朝刊).

Ueda, R., 2002, An Early Transnationalism The Japanese American Second Generation of Hawaii  
Interwar Years, *Levitt, P and Waters, M C (eds.), The Changing Face of Home: The Transnational  
Lives of the Second Generation*. Russell Sage Foundation.

吉見俊哉, 1987, 「都市としての盛り場—都市概念に関する若干の考察—」地域社会学会編『地  
域社会学会年報 第4集 現代都市論の視覚』時潮社